

## 科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 6 年 6 月 25 日現在

機関番号：34437

研究種目：基盤研究(C)（一般）

研究期間：2017～2023

課題番号：17K04889

研究課題名（和文）協同性の育ちに着目した幼小接続における音楽教育のプログラム開発

研究課題名（英文）Program development of music education focusing on the breeding of the cooperativeness in the connection between early childhood education and elementary school education

研究代表者

岡林 典子（OKABAYASHI, NORIKO）

大阪成蹊大学・教育学部・特別招聘教授

研究者番号：30331672

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 3,100,000円

研究成果の概要（和文）：本研究では、子どもの協同性の育ちに着目し、幼小の円滑な接続に寄与する音楽教育・表現教育の教材とプログラムの開発を目指した。プログラム内容については研究分担者らと検討を重ねた結果、協同性の育ちに加えて、急速な国際化が進む中で、日本の子どもの音楽的素地として、自国の音楽を楽しむことから、将来は世界の多様な音楽に目が向けられるように、日本語の五感を基盤にした豊かな感受性や表現力、創造性、即興性を育むことが必要であるとの考えに至った。そうした考えをもとに考案したプログラムを、幼稚園と小学校で実践を行い、研究成果として、音楽・表現教育の教材集を作成した。また、音楽的素地の育成に向けた書籍を出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究では、研究成果として、『幼・保・小で役立つ 絵本から広がる表現教育のアイデア』（一藝社,2018）と『子どもの音楽的素地を育むために - 日本語と協同性に着目したプログラムの開発 - 』（一藝社,2024）を出版した。これらは、日常にみられる子どもたちの音楽表現の実態を新たなプログラム開発のための基礎資料として捉え、それらをもとに考案した音楽・表現活動の内容と方法を明らかにしたものである。日本の子どもの音楽的素地育成に向けた系統的プログラムの一例を提起できたことに学術的意義が見出せる。

研究成果の概要（英文）：This study focused on the development of children's cooperativeness and aimed to develop teaching materials and programs for music education and expressive education that contribute to smooth connections between elementary and elementary schools. As a result of repeated discussions with the principal investigators, we came to the conclusion that, in addition to the development of cooperativeness, it is necessary to nurture Japanese children's musical backgrounds, from enjoying their own country's music, to developing rich sensitivity, expressiveness, creativity, and improvisational skills based on the Japanese language, so that they can focus on diverse music in the world in the future, in the midst of rapid globalization. The program was designed based on these ideas. Based on this idea, we devised a program and implemented it in kindergartens and elementary schools, and created a collection of teaching materials for music and expression education as a result of our research.

研究分野：音楽教育

キーワード：協同性 音楽教育 表現教育 幼小接続 プログラム開発 日本語の音楽的特徴

## 1. 研究開始当初の背景

2017年に幼稚園教育要領改訂の具体的な方向性が示され、幼小の円滑な接続を図る観点から「幼児期の終わりまでに育ってほしい姿」が、具体的に「自立心」「協同性」「言葉による伝え合い」「豊かな感性と表現」などの10項目に整理された。こうした幼児期に育まれる資質・能力を、徐々に小学校の各教科に応じた学びへと系統的につなげることが必要とされている。もとより、それぞれの項目は個別に取り出して指導されるべきものではないが、本研究では子どもの「協同性」に着目した。「協同性」は「友達との関わりを通して、互いの思いや考えなどを共有し、それらの実現に向けて工夫したり、協力したりする楽しさや充実感を味わいながらやり遂げるようになる」ことが望まれる内容で、「言葉による伝え合い」や「豊かな感性と表現」の育ちとも強い関連性を有している。

音楽はそもそも協同的、集団的な性格を有しているため、幼児期の音楽活動の中で芽生える協同性は、子ども同士の間関係の構築とも関わりながら、表現の深まりや創造性の広がりにつなげていく。続く小学校1・2年生の音楽科では、表現活動の指導に当たり、「歌唱」では「心を合わせて歌おうとする意欲」「共に歌う楽しさを感じる」ようにすることが大切だとされている。また、「器楽」では「友達が担当している楽器の役割を意識し」「気持ちを合わせた演奏の喜びを味わうようにする」ことが挙げられ、「音楽づくり」では「友達とかかわりながら、音楽的な約束事を決めて、楽しく活動することなどが指摘されている。これらのことより、教員には指導に際し、それぞれの音楽活動の中に「協同性」の育ちへの視点が求められていよう。

筆者らはこれまでの科研費研究(「幼小連携をふまえた音楽教育プログラムの開発:2013-2016年」)において4年間にわたって幼小の子どもをつなぐ音楽活動の研究に取り組んできた。その中で、園児と児童では発達の違いから協同性の質に違いがみられた。例えば、園児では楽器を自分で楽しむことから始まり、次第に友達と身体を近づけて鳴らし合う、動きを真似るなどにより、音楽的な協同性を深める様子が捉えられた。一方、小学1年生では、音楽づくりの活動で文字や言葉を用いて思いを共有したり、表情や視線なども意識的に用いて音を合わせるなど、多様に協同性を深める過程が確認できた。

そこで、本研究では「協同性」に着目し、「音楽活動の中でそれらが育まれる過程」を捉えたいと考え、子どもの音楽活動の質的なデータと科学的なデータを合わせて、プログラム開発に生かすことを計画した。例えば、ある音楽活動で園児たちに動作の模倣など協同性が発生したなら、どのように真似ているのか、手足の動きはどのようになされているのかなどを、観察記録による質的データと行動コーディングシステムによる科学的データを基に協同性の成立過程を分析し、小学校の学習指導案に反映させ、「手足の動きを用いる音楽的な模倣遊び」などのプログラムを開発する。また、そのプログラム内容を幼稚園での保育実践と、小学校での授業実践を通して検討し、考察を深めることにした。

## 2. 研究の目的

上記の背景から、本研究では、子どもの協同性の育ちに着目して、幼小接続期における音楽活動のプログラムを開発し、幼小の円滑な接続に寄与する音楽教育・表現教育の教材集の作成を目指す。また、教員養成系学科で音楽教育及び表現教育の科目を担当する筆者らは、学生が幼小接続の重要性を理解し、音楽・表現の指導において高い資質と能力を獲得できるように、開発したプログラムを活用して、指導方法の工夫や評価の観点を考えるなど、学生指導の充実を目指す。本研究では大学教育と幼稚園・小学校教育の双方の質の向上を究極的な目標としている。研究期間内の具体的な目標は以下の4点である。

- 1) 幼児期から児童期へとつながる音楽的育ちをとらえるために、幼稚園教育要領等(保育所保育指針、幼保連携型認定こども園教育・保育要領を含む)協同性と、小学校学習指導要領にみられる「協働性」について共通点、相違点をまとめる。
- 2) 研究代表者、研究分担者、研究協力者が連携体制を整え、音楽・表現活動について、発達段階を考慮した指導案を工夫し、保育・授業実践を行い、内容について検討する。
- 3) 2)の分析に基づき、一貫性、連続性を保障する音楽・表現プログラムを開発する。
- 4) 3)で開発したプログラムを基に、幼小接続に有益となる音楽・表現教育の教材集を作成する。

## 3. 研究の方法

- 1) 資料調査や文献研究と並行しながら、研究代表者、研究分担者、研究協力者の連携体制を整え、実践での子どもの行動分析を行う。
- 2) それらのデータをもとに、子どもの音楽的発達に沿った連続性のある音楽・表現教育プログラムを開発し、大学、幼稚園、小学校での検証とフィードバックを繰り返し、修正を行う。
- 3) 研究成果は随時、研究ノートや論文としてまとめ、研究会や学会で発表する他、最終年度には、本研究の総括として、円滑な幼小接続をふまえた音楽プログラム集を出版する。

## 4. 研究成果

### (1) 研究の成果

子どもは誕生直後から養育者をはじめとする人との関わりの中で、同じ物を見る、視線を合わせる、声や言葉や動きを模倣する、などの協同的な行為を通してやりとりを重ねて成長していく。本研究では、そのような幼児期と児童期の子どもたちの「協同性」の育ちの過程に着目して、プログラムの開発に臨んだ。研究を進めた結果、日本の文化社会の中で日本語を母国語として育つ子どもの音楽的素地についても考えを深めることとなった。

急速な国際化が進む日本の文化社会の中で、日本人として育ちゆく子どもたちの未来を見据え、筆者らは、「協同性」を育むことに加えて、子どもたちが自国の音楽を楽しむことから、将来的には世界の多様な音楽に目が向けられるように、「日本語の語感を基盤にした豊かな感受性や表現力、創造性、即興性」を育むことが必要であるとの考えに至った。

そうした考えに基づいて研究を進めることにより、その成果として、雑誌論文 18 本、学会発表 13 件、図書 2 点をまとめた。研究途中でコロナ禍となり、実践が思うように進められない時期もあったが、地道に分析を続け、幼児期から児童期への連続性を見据えた系統的なプログラムの一例を示すことができたことと捉えている。以下に、「わらべうた」を取り入れたプログラム、「絵本」を教材としたプログラム、「日本の音楽」にふれるプログラム、の概要を示す。

#### 「わらべうた」を取り入れたプログラム

「わらべうた」を取り入れたプログラムでは、活動内容と実践結果より、子どもの遊びや音楽が多様化する現代において、そのきっかけが保育や授業であっても子どもたちがわらべうたを心から楽しみ、遊び込む中で日本語の語感を感じて自由に表現する豊かな表現力や、創造性、即興性などが認められ、わらべうたをプログラムとして取り入れることの意義が見出された。

例えば、お手玉を用いて行った《いちじくにんじん》では、子どもたちが「いちじく/にんじん/さんしょに/しいたけ...」と語頭に投げる動作がくるように呼吸を合わせてタイミングを計ったり、やりとりが上手く続くようにリズムを共感して、相手に配慮しながら遊びを進める様子を捉えることができた。

また《らかんさん》の実践では、幼稚園の子どもたちが創造性を駆使してユニークな動作を考え、拍の流れののって即興的に動きをつなげてゆく姿が認められた。小学校では、工夫した動作を皆でつないでいきたいという同じ思いをもった子どもたちの協働的で創造的な姿が捉えられた。いずれも全員で円陣になると皆の顔が見えて楽しさが増している様子が窺えた。「羅漢回し」の遊びは、自分の考えた動きをクラスの仲間が全員で真似をしてくれるので、嬉しさ感じる体験でもあり、子どもたちは「羅漢回し」の遊びを体験する中で、「皆で動作を途切れずにつなぐ」という共通の目的をもち、クラスの一体感を感じながら協同（協働）性や表現力、創造性を育んでいることが確認できた。

また《しゅりけんにんじゃ》では、自発的に生じた遊びの中で、瞬時に思いついた言葉を入れ替えて手裏剣を投げ合う姿に子どもたちの創造性や即興性が見出された。わらべうた風に作り替えられた《しゅりけんにんじゃ》の遊びは、子どもたちに主体性やコミュニケーション力、創造性や社会性を育むことが実証された。

その他に、チーム対抗戦で行った《ちょっとパーさん》の遊びでは、唱えうたの拍ののって足じゃんけんの動きを友達と同期させたり、《十五夜さんのもちつき》では、身近に感じられる幼稚園の行事に合わせて、言葉を入れ替えることで日本語のリズムや響きを楽しむことができた。そのほかにも《ゲロゲロがっせん》《あぶくたった》《こどもとこどもがけんかして》《だるまさんがころんだ》など幾つもの実践を通して、音楽的素地を育むためのプログラムに「わらべうたを取り入れる」ことの有用性が見出された。

#### 「絵本」を教材にしたプログラム

日本語を大切に扱い、その面白さや楽しさを感じる絵本を用いた実践事例からは、日本語に対する感受性、創造性、表現力や日本語のリズムや抑揚などの語感など、音楽的な素地の育成を促す上で有意義であることが確かめられた。また絵本を用いた活動プログラムでは、子どもたちが絵本教材を通して日本語のリズム感、かけ合いの間やタイミング、呼吸や声を合わせることの心地よさを体得することができていた。絵本を介した保育者や教師、友達とのやり取りでは、反復や応答により飽きずに音楽的な表現力や創造性を活かしている様子が捉えられた。このように、絵本は音楽・表現活動の教材として有用であることがプログラムの実践により実証できた。

『かぞえうたのほん』や『ドオン!』などの絵本を教材に用いて、「唱えうた」や「応援フレーズ」の創作、「応援合戦」や「まねまね合戦」のかけ合いなどの実践を試みた。

『かぞえうたのほん』の中の《いーいーいーかぞえうた》の実践では、4 歳児が絵本の絵をモデルにして、様々な表情や動きをつけて互いに身体表現を見せ合って楽しむ様子が捉えられた。そこでは、単なる絵本の模倣ではなく自分なりに表現することを心から楽しみ、喜び合う姿が見て取れた。また、向き合う相手とタイミングよく呼応する表現がなされていた。子どもたちがそのように生き生きとした表現を生み出した背景には、絵本を子どもたちに読み聞かせたり、子どもたちと共に表現を楽しむ保育者の存在があった。4 歳児の表現意欲や創造性を引き出した保育者の読み聞かせには、声質・声量の多様な変化、弾みのあるリズムカルな音声表現、テンポの変化、表現意欲を引き出す言葉や動きによる働きかけ、などの工夫があることが明らかに

なった。

《へんなひとかぞえうた》の実践では、5歳児が元歌に倣って自分の面白い「かぞえうた」を作ろうとする意欲的な姿が捉えられた。子どもたちがうたに表したい思いは多く、元歌よりも長くなる傾向がみられたが、保育者はそれを規制することなく、子どもに表現を委ねていた。また、互いの表現の面白さや楽しさを共感し認め合う子どもたちは、本プログラムを通して、友達との協同的な関係を築き、日本語に対する豊かな感受性や創造性を育てていることが確認できた。

絵本『ドオン!』を教材とした5歳児の実践では、園で共に過ごす仲間を応援しようと、それぞれの子どもがオリジナルの応援うちわを作成し、気持ちを一つにして協同的に関わる姿があった。また、音楽的要素を含む日本語を拠り所にして、様々な思いのこもった応援フレーズが生み出された。その基盤には、日々の豊かな生活経験や生活状況、そして幼稚園で共に過ごす仲間への思いや感情の存在があることが確かめられた。プリミティブな表現ではあったが、小学校以降の音楽づくりにつながる萌芽を捉えることができた。加えて、応援に用いたうちわにはうちわの動きにより、言葉の拍節を視覚的に捉えることができる、うちわの動きを合わせて他者とリズムを共感することができる、クラスの友達とうちわを持って応援フレーズを唱えることにより、仲間としての繋がりを感じることができる、などのような教材の有用性が認められた。

小学1年生の実践では、絵本をきっかけに「まねまね合戦ゲーム」を考案し、チーム対抗戦を行った。この活動内容は表現の工夫を発表するだけでなく勝敗のあるゲームを取り入れたことが、子どもたちの表現意欲を効果的に引き出していた。オノマトペに動きを伴った表現を工夫する活動や、チームで協力して相手チームの表現を真似る活動は、日本語に対する感受性、創造性、表現力や子ども同士の協同(協働)性などの音楽的素地の育成を促す上で有意義であることが確かめられた。

#### 「日本の音楽」にふれるプログラム

「わらべうた」や「絵本」に続き、日本の伝統的な音楽文化へとつなげるために考案した「日本の音楽」にふれるプログラムでは、「和楽器との出会い」や「創作口唱歌」、「祇園祭」や「和太鼓」などの活動内容について、実践を通して検証を進めた。

「和楽器との出会い」では、4歳児の和楽器探索活動より、子どもたちが初めてふれる和楽器と対峙して音のイメージをオノマトペで表したり、太鼓の打つ場所による音の違いに気づいたり、「地藏盆のゆかたを着て踊る時の太鼓だった」などのように生活経験と結び付けて音を捉えたりしていることが理解できた。幼い子どもであっても、じっくりと楽器と対峙することにより、音の特質を多様に感じ取れることが分かった。また、和楽器の音をオノマトペで表した「創作口唱歌」を用いた実践では、大人では思いつかないようなユニークなオノマトペの表現が多様に見られたが、どれも締太鼓、鉦、チャップの3種の楽器の奏法の違いや音の違いを捉えたオノマトペで表されていることが明らかになり、子どもたちが言語を習得する過程で身に着けた日本語の音楽性と、自己の内部に育ててきた感性とを関わらせ、自分の言葉を用いて主体的に表現していることが確認できた。また体験を通して、子どもたちに協同的な意識が芽生えていることが捉えられた。

「祇園祭」を題材としたプログラムでは、幼稚園5歳児の実践でお囃子のCDを聴いて踊りだしたり、「掛け声カード」を意欲的に選ぶ姿などが捉えられた。「掛け声カード選びをもっとしたい」という発話もあり、作成した教材が効果的に用いられた。また、隣合って鉦の音を合わせて打とうとしたり、「こんちきちん」の唱歌を唱える声に意識を向けて鉦の音を合わせようとするなど、音楽的に協同する姿が認められた。2年生の実践からは、子どもたちが「祇園祭」の知識を深めると共に、楽器の音の違い、奏法、音楽の成り立ちについて気づきが得られていることが確認できた。さらに《祇園囃子》を体験することにより、子どもたちがお祭りに音楽があることを知り、興味を持ってき学習を進め、学びを得られたことが明らかになった。グループ活動においては、複数の子どもが目的を共有して協力し合う協働学習の姿を捉えることができた。5歳と2年生の実践全体を通して、幼児期の子どもたちの表現活動で芽生えた協同性が、小学校1年生、2年生へと発達的に深まり、協働学習へとつながっていくことが確認できた。

「和太鼓」を用いた3年生、4年生の実践では、子どもたちが互いに対話をして交流を深めながら、学びを進めていることが捉えられた。また、グループ活動においては複数の子どもが目的を共有して協力し合う協働学習の姿が捉えられ、クラスの中で学ぶことの意義を子どもたちが自ずと理解していくことが確認できた。また、西洋音楽においてリズムを取るときの一律な「タン」や「タタ」ではなく、「ドコドコ」「ドコンコ」といった日本人の伝統的な口唱歌が、子どもたちの和太鼓の音の性質への気づきをもたらしように導いたことが分かった。

今回の実践は、単にリズムカードを並べて作る活動とは異なり、和太鼓の演奏経験が実感を伴い、強弱や奏法にも工夫された、いわば生きた形でのリズムづくりに反映されていた。和太鼓演奏の発展として、口唱歌を用いたリズムづくりの活動が子どもたちにとっても楽しく、自分のリズムをつくるという意味で非常に有意義であった。このように、「日本の音楽」にふれるプログラムは、音楽的素地を育むために有用であることが実践により実証できた。

全体を捉えてみると、先に挙げた課題に対して、「乳幼児期から児童期への連続性を見据えた音楽的素地形成」のプログラムの一例を呈示することができたのではないかとと思われる。また、「日常生活における子どもたちの自由な表現の実態」の延長上に据えられるプログラムが開発されたのではないかと考えられる。

「わらべうた」や「絵本」は特に目新しい題材や教材ではないが、それを子どもの乳幼児期からの一連の成長に見合うようにつなげてみると、その有用性がさらに際立ってくる。また日本音楽への自然なつながりを理解することができる。なぜその教材を取り入れるとよいのか、何が良いいのかを保育者や教師がよく理解していることが、子どもの音楽的素地の形成には大切であることが示唆された。

## (2) 研究の意義

本研究では、「日本の文化社会に育つ子どもの音楽的素地を乳幼児期から児童期への連続性を見据えて育むこと」と「日常生活における自由な子どもたちの表現の実態を、保育・教育実践の方法や内容に結びつけること」を目指してプログラムの開発を進めてきた。日常の観察事例と、考案したプログラムの実践結果の考察から、以下の点を本研究の意義として提示する。

日本の子どもの音楽的素地形成に向けた系統的なプログラムの一例を提示することができた。日本語を基にした音楽・表現教育のプログラムの実践事例を通して、子どもたちの協同する姿を詳細に示すことができた。乳児期から小学校中学年までの子どもに音楽的素地が育まれていく過程を示すことができた。

## (3) 今後の課題

筆者らは幼児期から小学校への接続期を「音楽的な素地をしっかりと育む時期」であると捉えている。そして、幼児期に育まれる資質・能力を小学校の各教科の学びへと系統的につなげる方法や内容について共同研究の仲間と話し合いを重ね、プログラム開発に取り組んできた。これらの研究では、子どもが獲得しつつある日本語をもとに、音楽的視点から絵本やわらべうた、和楽器などを教材として「掛け声」「唱えことば」「オノマトペ」などを取り入れて、日本語から日本の音楽につながる系統的な音楽・表現活動を提示してきた。

リトミックの研究者で和太鼓奏者でもある長尾（2003/2008）は、日本の音楽文化と身体文化の特徴を基にした音楽教育を探求し、日本の子どもたちには幼児期から「日本的な音色やリズム様式」に対する親近感を持たせるような体験が必要であると述べている<sup>1)</sup>。他方、学校教育においても和楽器の扱いが小学校3、4年生へと拡大され、我が国の音楽文化や伝統に関する教育の改善が図られようとしているが、権藤（2019）は「我が国や郷土の音楽」に関する学習の充実が、課題と改訂の方針として示されることは、西洋由来の「見方・考え方」を自明の前提とする日本の音楽教育の歪みであることを指摘している。さらに、2015年発行の小学校教科書の2社ともが日本の伝統的な音楽に関わる頁数が1割にも満たなかったことや、2020年発行の教科書においても大きな変化がないことを挙げ、「西洋音楽ベースの『音楽性』を自明のものとして次の10年の音楽科指導が行われようとしている」ことにも言及している<sup>2)</sup>。

幼児の音楽教育では、主にタンバリンやカスタネット、トライアングルや鈴などのリズム楽器が多く使用されているが、この度の和楽器探索では4歳児がお祭りなどの生活経験を通して和太鼓や拍子木、鉦などにふれ、その音を豊かに捉えていることが明らかになった。幼児期には従来の簡単なリズム楽器が当たり前ではなく、和楽器にも目を向け、日本の音が感じられる環境を整えていく必要があるだろう。

筆者らはこれまでは4歳児以降の子どもたちを主な対象とし、協同性の育ちに着目して実践を行ってきたが、連続的な子どもたちの育ちを捉えるならば、4・5歳児の「協同性」の基盤である「芽生えの時期」にも目を向ける必要があると考えている。発達心理学およびその隣接分野では、人間の子どもにはかなり早期から協同性の基盤的能力のあることが確認されている。また、乳児には生後9か月頃に、他者と世界を共有するための基礎的機構である「共同注意」の飛躍的な発達が認められ、この社会的能力が協同性の基盤能力であると指摘されている。低年齢児が協同性の基盤を有しているならば、音楽的な協同性は周囲の人との関わりの中でどのように芽生え育ち、幼児期、児童期へと広がりを見せるのだろうか。また、協同性を基盤として低年齢の子どもたちの音楽的な素地を豊かに育むためには、どのような活動を提供していけばよいだろうか。これまでの研究成果をふまえ、今後はそのような問いをもって本研究に取り組みたいと考えている。

## 【注釈】

- 1) 長尾満里（2003）「日本の音と身体の動き - 日本の民族芸能の『リトミック教育』への教材化試論」日本ダルクローズ音楽教育学会編『リトミック研究の現在』77-90、長尾満里（2008）「日本の音と身体の動き - ワークショップから学んだこと - 」日本ダルクローズ音楽教育学会編『リトミック実践の現在』154-162
- 2) 権藤敦子（2019）「学校教育と民族音楽文化の関係性(2)」『広島大学大学院教育学研究科紀要』第一部、68：49-56

## 5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計18件（うち査読付論文 16件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 4件）

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・山崎菜央	4. 巻 第19号
2. 論文標題 和太鼓を用いたリズムづくりの試み	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 123-131
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井康子・佐野仁美・岡林典子	4. 巻 巻 第59号
2. 論文標題 創造性と協働性を重視した幼児の表現遊び 音楽づくりへのつながりを視野に入れた4歳児の実践から -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 甲南女子大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 143-150
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・矢野真	4. 巻 第5号
2. 論文標題 教員養成課程における「感覚をつなぐ表現活動」の試み - 「保育内容演習（表現）」での音楽と造形を統合させた実践から -	5. 発行年 2023年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 57-65
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子	4. 巻 1
2. 論文標題 日本の子どもの音楽的素地とリトミック教育に関する一考察 - 日本語と身体文化に注目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 リトミック・オンライン・ジャーナル	6. 最初と最後の頁 20-29
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子	4. 巻 38
2. 論文標題 和楽器を用いた表現活動において育まれる力 - 幼稚園年中児のオノマトペ表現に注目して -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 関西楽理研究	6. 最初と最後の頁 21-38
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・山崎菜央・南夏世	4. 巻 18
2. 論文標題 協働的な学びを育む音楽づくりの試み - 和太鼓を用いた小学3年生の授業から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都女子大学発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 25-34
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・矢野真	4. 巻 4
2. 論文標題 教員養成課程における「感覚をつなぐ表現活動」の試み - 本学児童学科の「保育内容演習 (表現)」の授業内容から -	5. 発行年 2022年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-8
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている (また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・山野てるひ	4. 巻 第3号
2. 論文標題 教員養成課程における音・形・色を関連づける表現プログラムの研究 - 音 (音環境) とオノマトペに関する授業内容から -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-15
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 水戸部修治	4. 巻 第3号
2. 論文標題 幼・小の接続を重視した言葉の育ちを支える援助と指導の在り方に関する考察－読むことを中心に－	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都女子大学教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 30-45
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・南 夏世・山崎菜央	4. 巻 第17号
2. 論文標題 幼小をつなぐ音楽教育のプログラム開発 「祇園囃子」を教材として -	5. 発行年 2021年
3. 雑誌名 京都女子大学「発達教育学部紀要」	6. 最初と最後の頁 143-152
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・岡林典子・小畑郁男・土田圭子	4. 巻 第37号
2. 論文標題 小学校低学年における旋律づくりの試み－音楽的イディオムに着目した実践の可能性 -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 関西楽理研究	6. 最初と最後の頁 1-17
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・山野てるひ	4. 巻 2号
2. 論文標題 教員養成課程における音・形・色を関連づける表現プログラムの研究 - 日本語と和楽器を用いて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学 教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 1-14
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -



1. 著者名 難波正明	4. 巻 2号
2. 論文標題 領域「表現」の意義と可能性に関する一考察 - 幼児期の表現と感性を見据えて -	5. 発行年 2020年
3. 雑誌名 京都女子大学 教職支援センター研究紀要	6. 最初と最後の頁 15-29
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・辻誠・深澤素子・山崎菜央	4. 巻 第15号
2. 論文標題 領域「表現」と小学校音楽科をつなぐ和楽器を用いた活動の試み	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都女子大学 発達教育学部紀要	6. 最初と最後の頁 109-119
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている(また、その予定である)	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・岡林典子	4. 巻 45
2. 論文標題 オノマトペを用いたリズム創作の可能性 - 協働性に着目して -	5. 発行年 2019年
3. 雑誌名 京都橘大学研究紀要	6. 最初と最後の頁 83-95
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 佐野仁美・岡林典子・坂井康子	4. 巻 34号
2. 論文標題 音楽づくりへつながる幼児の表現遊び - 絵本のオノマトペを用いた実践から -	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 関西楽理研究	6. 最初と最後の頁 23 - 42
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 坂井康子・岡林典子・佐野仁美	4. 巻 15(28)
2. 論文標題 0. 1. 2歳の自発的な音楽表現から音楽づくりへ	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 音楽教育ジャーナル	6. 最初と最後の頁 89 - 94
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

1. 著者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子・難波正明・南夏世・山崎菜央・深澤素子	4. 巻 14(1)
2. 論文標題 領域「表現」と小学校音楽科をつなぐ音遊びの可能性-「マカス作り」によるオノマトペ表現と協同性の 成り立ちに注目して-	5. 発行年 2018年
3. 雑誌名 京都女子大学「発達教育学部紀要」	6. 最初と最後の頁 115 - 124
掲載論文のDOI (デジタルオブジェクト識別子) なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 -

〔学会発表〕 計13件 (うち招待講演 0件 / うち国際学会 0件)

1. 発表者名 井越直美・佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 小学校中学年の旋律づくりの試み( ) - 韓国系国際学校の子どもたちに焦点をあてて -
3. 学会等名 日本音楽表現学会 第20回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 音楽づくりにつなげる幼児の表現遊び 和太鼓を用いた5歳児の事例をもとに -
3. 学会等名 全国大学音楽教育学会第37回大会
4. 発表年 2022年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 小学校中学年の旋律づくりの試み 替え歌を用いて ( )
3. 学会等名 日本音楽表現学会 第19回大会
4. 発表年 2021年

1. 発表者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子
2. 発表標題 幼小をつなぐ表現教育のプログラム開発 - 祇園祭を題材として -
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第31回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 小学校中学年の旋律づくりの試み 替え歌を用いて
3. 学会等名 日本音楽表現学会第18回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 岡林典子
2. 発表標題 地域のお囃子を取り入れた表現活動の展開 「祇園ばやし」を素材として
3. 学会等名 日本保育学会第73回大会
4. 発表年 2020年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 旋律づくりの指導の可能性 - 小学校低学年における実践から -
3. 学会等名 日本音楽表現学会第17回大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 岡林典子・佐野仁美・坂井康子
2. 発表標題 音の違いに気づく表現活動の試み - 和楽器を用いて -
3. 学会等名 日本学校音楽教育実践学会第24回全国大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 坂井康子・佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 和の音とかけ声を用いた授業実践の試み
3. 学会等名 日本音楽教育学会第50回東京大会
4. 発表年 2019年

1. 発表者名 佐野仁美・岡林典子
2. 発表標題 オノマトペを用いたリズム創作の可能性 - 幼小接続の視点から -
3. 学会等名 日本音楽表現学会第15回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂井康子・岡林典子・佐野仁美
2. 発表標題 絵本から始まる表現活動の展開(3)
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 岡林典子・坂井康子・佐野仁美
2. 発表標題 絵本から始まる表現活動の展開(4)
3. 学会等名 日本乳幼児教育学会第27回大会
4. 発表年 2017年

1. 発表者名 坂井康子・岡林典子。佐野仁美
2. 発表標題 音楽教育における「音象徴」について - オノマトペの記述と音声的実態の分析による考察
3. 学会等名 日本音楽教育学会第48回大会
4. 発表年 2017年

〔図書〕 計2件

1. 著者名 山野てるひ・岡林典子・水戸部修治 編著	4. 発行年 2018年
2. 出版社 一藝社	5. 総ページ数 198
3. 書名 幼・保・小で役立つ絵本から広がる表現教育のアイデアー子供の感性を豊かに育むためにー	

1. 著者名 岡林典子	4. 発行年 2024年
2. 出版社 一藝社	5. 総ページ数 238
3. 書名 子どもの音楽的素地を育むために - 日本語と協同性に着目したプログラムの開発 -	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究分担者	難波 正明 (NANBA MASA AKI) (10278442)	京都女子大学・発達教育学部・教授  (34305)	
研究分担者	佐野 仁美 (SANO HTOMI) (10531725)	京都橘大学・発達教育学部・教授  (34309)	
研究分担者	坂井 康子 (SAKAI YSUKO) (30425102)	甲南女子大学・人間科学部・教授  (34507)	
研究分担者	南 夏世 (MINAMI KAYO) (70514248)	神戸海星女子学院大学・現代人間学部・教授  (34508)	
研究分担者	山野 てるひ (YAMANO TERUHI) (70168631)	京都女子大学・発達教育学部・教授  (34305)	

6. 研究組織（つづき）

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
研究 分 担 者	水戸部 修治  (MITOBE SYUUJI)  (80431633)	京都女子大学・発達教育学部・教授    (34305)	

7. 科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕 計0件

8. 本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

共同研究相手国	相手方研究機関